

第1回FDフォーラム 「私の授業作り」 大学教育研究センター FD実施支援対策検討部会が開催

大学ではこれまでFD（ファカルティ・ディヴェロップメント）のための活動をいくつか行ってきた。FDとは「大学教員の教師としての資質向上の営み」である。大学教員には教育・研究・学内管理運営・社会奉仕の4つの役割がある。このうちほぼすべての教員に共通するのは教育と研究である。研究に関してはトレーニングを受ける機会、研鑽を積むためのインフラにも恵まれているが、こと教育に関してはトレーニングを受ける機会も、方法・技術を改善するチャンスもほとんどない。かつてイギリスでは高等教育の急激な拡大に伴い大学教員が不足した。この不足を補うために科学技術者を大学教員に転用したのだが、優秀な研究者は必ずしも優秀な教員ではないという事実直面し、SD（Staff Development：FDの類語）という概念が発達した。アメリカでは1970年代に大学内外の圧力によって同様にFDの制度化が進行した。しかしこの概念・用語が我が国に輸入されたのは80年代であり、それが動き始めたのはようやく90年代後半に入ってからのことである。とはいえまだ組織的なFD活動が精力的に実施されている大学は数少ない。

このような状況の中、大学ではいち早くこのFD活動に取り組んできた。授業改善のための有益な情報源・資料を得るための「学生による授業評価」（平成7年度開始）、総合企画室を中心とした各種講演会（同6年度開始）ならびに年2回の研修会（同8年度開始）の開催など、多方面にわたり、教員の教育活動を改善するための機会を提供してきた。3月21日に開催された第1回FDフォーラム「私の授業作り」はこれらの一連のFD活動の一つとして位置づけられる。

フォーラム「私の授業作り」の趣旨は「密室状態にある授業・教室を開放し、授業改善のためのアイデア・意見交換を教員間で積極的に行う」ことにある。高等教育機関の教員を対象とした教授法などについては、初等・中等教育機関の教員とは異なり、研究や開発があまり進んでいない。もちろん大学の教員は個々に授業作りに関して創意工夫を凝らしてはいるが、それは本人に帰するばかりで、教員全体の共通の財産とはなっていないのが現状である。そこで中部大学教育研究センター・FD 実施支援対策部会では、個々の教員がどのように工夫をして授業を作っているかということを持ち寄り、これからの授業作りのヒントが得られるようにしたいと考え、標記のフォーラムを開催した。



フォーラムの報告者（中央3人）

第1回は千谷慧子教授（理学教室）、田中淳子助教授（人文・社会教室）、櫻井誠講師（応用化学科）から、どのように授業作りをされているかについてのお話をいただき、その後、参加者を交えての意見交換を行った。千谷教授からは「いかにして数学を通じて感動を伝えるか」、田中助教授からは「リーガルマインド（法的思考）をどのように学生に理解させ伝えるか」、櫻井講師からは高校時代に化学を未履修の学生をも視野に含んで「いかにして化学に対する興味・関心を引き出すか」について、それぞれ有益な報告があった。フロアからは授業を進める上でどのような工夫や苦心があるのかなどについての質問が出され、盛会のうちに第1回のフォーラムを終えることができた。

参加者からは「大変よい試みである」「是非何回か開催してほしい」「FDが中部大でも始まったと知り、とても嬉しく思う」「自信を失いそうになった時などの支えの場としたい」「今までほとんど閉ざされていた教室を開かれたものにし、他の教員が参考にできる機会を作っていただいたことに感謝する」との評価をいただいた。また今後の活動に対して「発表内容をビデオに記録し、後から希望者が試聴できるようにしたらどうか」「ネットを利用し、実際の授業のビデオをストリーミングビデオなどで流したり、フォーラムの内容をテーマとしたメーリングリストを作るなどしたらどうか」「もっと具体的なテーマに絞り込んだ形のフォーラムも開催してほしい」「板書の仕方、話し方等、基礎的な技術上の問題点をわかりやすくマニュアル化することも必要なのではないか」「演劇のプロを呼んで全教員に声を心に届かせる方法を実演とともに学ばせてはどうか」「もう少し気楽に参加できる形にしてほしい」等の要望・意見が寄せられた。

FD実施支援対策検討部会ではこれらの要望・意見を積極的に採り入れながら、今後の活動をさらに有益なものとしていきます。

(大学教育研究センター副センター長

助教授 三浦真琴)